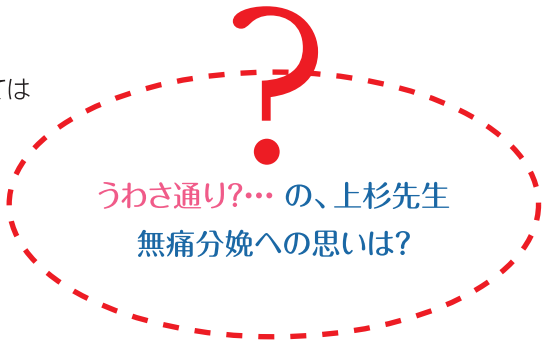
無痛分娩への思い･･･

vol.14年報/2019.11.1発行

このクリニックでの仕事の大きな部分を占める無痛分娩については
着任以来まだ20前後の施行数であり、一般的なレシピ･方法については
全国の病院ネットワークを通じてのものと前任の山﨑先生が
残してくださったものを複合しつつ、当クリニックのお産のルール
に沿うべく少々のカスタマイズを試みています。
このカスタマイズが妊婦さんのご希望にぴったり合う日がいずれ
来ることを願っています。助産師の先生、産科の先生のご指示を
仰ぎつつ、安全な無痛分娩を心がけてまいります。



無痛分娩は医療の枠の中にあって受ける側が積極的に選択できる数少ない医療行為です。

状態によっては外科手術に匹敵する負担のかかる分娩という行為に対して様々な葛藤や恐怖、身体的な負担が生じるのはおそらく当たり前のことですが、これを乗り越える方法については必ずしも自力でないといけない理由はありません。

外科手術のときは可能な限り鎮痛を行います。そのことによるメリットには様々な報告があるのですが、つまるところ受ける側が楽で負担が少なく、活動性を保つことができることを目的としています。
医療技術は日々進化を続けており、様々な鎮痛法で外科手術がおこなわれ、ペインクリニックや緩和医療という痛み止めのための治療が当たり前に行なわれている世の中で、妊婦さんだけがこれを使ってはいけない理由を私は説明できません。
実際に受けるかどうかは別として、お産をする際にかかるストレス回避のための選択肢が存在するという意味だけでもお役に立つことがあればと思います。

いわゆる「自力」でのお産という観点から見ますと、

無痛分娩は医療という道具を使って痛みを抑えるだけの「自力」であり、
赤ちゃんを「産む」ことに関して力を入れて頑張ることは普通の分娩と変わることなく、
むしろ無痛分娩ではない場合より少し難しいかもしれません。
痛み止めによる筋力低下は現在の薬剤の使い方では実はそれほどありません。
ただ、微弱陣痛になることがあったり、激烈な痛みの中で必死に産もうとして力を入れる場合と比べると、どうしても力の差があることなどから分娩時間の延長や吸引分娩の増加はございます。
もちろん様々なストレス回避のメリットはあるのですが結局分娩自体は決して簡単ではなく、
どちらの方法でも分娩はやはり大変なことだと思います。

昨今の医学界は非常に窮屈な状況にあり、エビデンスとガイドラインに縛られる部分が大きいため自由度は少なくなりつつありますが、その中でも必ず個々の病院事情に合ったものが作られるべきであり、それが当クリニックで無痛分娩を希望される妊婦さんの想いに沿うことができるものであればとも考えています。

進化の過程はゆっくりになりますが、何かを残すことができれば、とこの先も研鑽を積んで参りたいと思います。

無痛分娩の前には必ず説明の時間を設けております。
可能な限り時間を取りますので、ご意見やご希望を
余すところなくお聞かせいただけたら幸いです。

Web 無痛分娩についてのバックナンバーはホームページからダウンロードできます